



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報・渉外委員会

第58回日本手外科学会 学術集会を振り返って

第58回日本手外科学会学術集会
会長 **根本孝一**
(防衛医科大学校整形外科学講座)

目次

- 第58回日本手外科学会を振り返って
- 新名誉会員のご挨拶
- 新特別会員のご挨拶
- JSSH-HKSSH exchange traveling fellow報告記
- ハンドギャラリー(生田コレクション10)
「レンブラントの手 Rembrandt's Anatomy Lesson of Prof. Tulp」
- 手外科温故知新
Sigmoid notchとは
- 第6回 手外科医のリスクマネジメント
「手外科領域の安全管理」
- 関連学会・研究会のお知らせ
- 編集後記

第58回日本手外科学会学術集会を平成27年(2015年)4月16日(木)・17日(金)の2日間、東京都新宿区 京王プラザホテルで開催させていただきました。防衛医科大学校整形外科手外科班と慶應義塾大学医学部整形外科上肢班で合同準備委員会を設置して企画運営にあたりました。今回、約1,750人のご参加を得まして、盛会裏に終了できたことを感謝申し上げます。

学術集会のテーマは「守・破・離」としました。これは本来、武道や芸道を修得する過程を表現した言葉ですが、手外科にも当てはまる言葉です。すなわち、過去の先達に学び、現在の工夫を行い、未来を切り開くという意味です。手外科における過去の経験と現在の最新知見を俯瞰して、さらに新たな発展につなげる一助にしたいとの思いからです。

特別講演は、矢部 裕先生に「手外科のときめき 一日手会の過去・現在・将来について」、菊地 眞先生に「わが国における医療機器研究・開発の現状と将来」の講演をしていただきました。教育研修講演は、伊藤 恵康先生に「最も悲惨な野球肘 ―離断性骨軟骨炎」、上羽 康夫先生に「キーンベック病の成因と治療」の講演をしていただきました。また、防衛衛生セミナーとして、川口 雅久1等陸佐による「自衛隊による国際貢献活動と災害派遣」の講演を行いました。

招待講演は、英国からIan Winspur先生とHiroshi Nishikawa(西川 洋)先生、スウェーデンからMikael Wiberg先生、スイスからJörg Grünert先生、米国からWilliam H. Seitz, Jr.先生、台湾からDavid Chwei-Chin Chuang先生、シンガポールからAymeric Lim先生をお招きし、それぞれの得意分

野の講演をしていただきました。

シンポジウムは10テーマ、パネル・ディスカッションは7テーマ、ランチョン・セミナーは11題を開催しました。応募演題は629題をいただきまして、査読委員による厳正な審査により562題を採用させていただきました(採択率89.3%)。

特別講演、教育研修講演、防衛衛生セミナー、招待講演、シンポジウム、パネル・ディスカッション、ランチョン・セミナーとも全て盛況であり大変好評でした。演題発表は各会場ともに活発な討論が行われました。9会場に分かれての同時進行でしたので、お聴きになりたい講演や演題の全てが聴けるとは限らなかったことを申し訳なく思います。自衛隊衛生に関する発表、陸上自衛隊中央音楽隊の演奏支援など防衛医科大学校の特色も多少は出せたように思います。演者、座長、討論参加者、企業関係者をはじめ全ての皆様に御礼申し上げます。



新名誉会員のご挨拶

日本手外科学会名誉会員に推挙されて

キッコーマン総合病院外科系センター長 落合直之

この度は、伝統ある日本手外科学会の名誉会員にご承認戴き誠にありがとうございました。

私は、故阿部績先生に卒業2年目の研修先であった都立豊島病院で手外科の手ほどきを受けました。来る日も来る日も阿部先生の手術の助手を務める中で、手外科の素養はそのまま筋骨格系の治療を守備範囲とする整形外科の基本手技である事を確信致しました。その意味からも整形外科の総ての分野を志す若い医師は須く手外科の領域を一度は修練すべきであると今でも信じて疑いません。

さて、昭和56年に本学会会員になり、昭和62年5月から平成26年3月まで評議員を努めさせていただきました。この間、平成16年4月から同18年4月までと、平成22年5月から同26年4月まで2度に渡り日本手外科学会理事を努めさせて戴き、平成19年4月には、つくばの地で、第51回の日本手の外科学会学術集会を開催させて戴きました事は良き思い出となっております。この時はノーベル賞受賞者で筑波大学の学長であった江崎玲於奈氏肝いりで建設されたつくば国際会議場エポカルの全館を贅沢に利用させて戴き大変ユニークなプログラムを組ませて戴きました。また初めて、e-posterを導入したのもこの学会からであることを誇りに思っております。

しかし、なんとと言っても、平成24年4月から同26年4月まで一般社団法人となった日本手外科学会の理事長を勤めさせて戴き、この間に、前理事長が敷かれたレールに乗って運動した結果、運良く日本専門医制評価・認定機構から基本診療領域である形成外科と整形外科の上に乗る subspecialty 診療領域として手外科診療領域の専門医制度を承認して戴けたことは、私が本学会に寄与できた最大の功績と些か自負しております。日本専門医制評価・認定機構は去る平成26年5月に日本専門医機構になりましたので、その直前のタイミングで subspecialty 診療領域の枠組みに認められたことは、誠に幸運でありました。

平成27年度からは新専門医制度となりましたが、これまでの努力を着実に継続することで手外科診療領域の専門医制度が確固たるものになっていくことを念じ、また日本手外科学会の益々の隆盛を祈念して名誉会員ご承認に対する御礼のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

新特別会員のご挨拶

日本手外科学会特別会員に推挙されて

新潟万代病院 整形外科 牧野正晴

私は昭和50年(1975年)新潟大学医学部を卒業し、直ちに故田島達也教授の整形外科教室に入局しました。当時の教室は整形外科のあらゆる分野を代表する先輩方が臨床に研究にと活躍されておりエネルギーにあふれる教室でした。特に手の外科では国内外を問わず多くの研究者と活発な交流がなされており、卒業したての小生には未知の世界に足を踏み入れた感じがしました。また、当時はマイクロサージャリーの発展期であり、近県からも送られてくる患者の切断指・肢再接着に夜を明かすこともありましたし、種々の機能再建術の素晴らしさに魅了される日々でした。その後、関連病院をロテーションするなかで一見地味な整形外科保存療法も研修しつつ、手の外科以外の専門分野の先輩たちから手術指導を受けました。これらの経験から10年前まで脊椎外科、荷重関節外科手術も行うことができ、運動器としての「手」の認識、その手術手技の応用に役立ちました。田島教授が言われていた「整形外科全般を広く習得しその基盤の上に自分の専門分野を作ること」を自分なりに実践できたと思っています。

1985年には田島教授の推挙を受けDr. SwansonのもとでHand Fellowの経験を積めたことは今日の小生を形成する大きな糧となりました。日本人以外の人達とのcommunication toolを少しは身に着けることができました。2013年にはSwansonの推薦を受けAmerican Society for Surgery of the Hand (ASSH)のinternational memberになりました。田島先生、Dr. Swansonをはじめとする諸先輩方には心から感謝しています。

最近10年間の活動では手外科学会、日本整形外科学会、外保連手術委員会等の多くの委員会で仕事をすることができました。この間、疲れ切った帰りの新幹線の中で、田島先生の教授時代の生活を思い出すことで、その弟子として弱音ははけないと己を鼓舞することもありました。手術調査2009、および新患調査2012、ともに整形外科ホームページから閲覧できますが、これらのデータベースを作ることで整形外科新専門医制度に根拠を与えることができ、実りのある委員会活動ができたと思います。

1997年に、8年経過した25歳男性の舟状骨偽関節でしかも遊離腸骨移植術6か月後でしたが、最初の血管柄付き第二中手骨基部移植術に成功し、その後多くの先生方から舟状骨偽関節手術の選択枝の一つとして認めていただいたことは大きな収穫でした。

最後に、特別会員にさせていただける年齢にはなりませんが、学会活動、臨床研究等から引退するつもりではなく今後もできることはしてゆくつもりです。

JSSH-HKSSH exchange traveling fellow報告記

大阪掖済会病院 田中祥貴

今回平成27年度JSSH-HKSSH exchange traveling fellowとして平成27年3月19日から29日までの間、香港で学会参加や施設見学等の機会をいただきましたので報告させていただきます。

渡航前準備

渡航前の準備については学会のsecretaryであるHK Wong先生がホテルの手配や見学する病院の調整等、非常に親切にしてください、全くトラブルなく、準備することができました。

Elbow cadaveric dissection workshop

学会に先立ち3月20日にPrince of Wales Hospital内にあるOrthopedic learning centerで上記workshopがあり、参加しました。同centerでは手関節鏡で有名なPC Ho先生が毎年、手関節鏡のcadaver workshopを行っているので実際行かれた日本の先生方も多いと思います。今回はカナダのGraham King教授をはじめ欧米から招待された3名の先生が新鮮遺体を用いて人工橈骨頭置換や、外側副韌帯再建等の手術を展示され、その後4人1組で同様に手術を行う形式でした。改めて解剖の重要性を認識できました。

28th Annual meeting of HKSSH

3月21日・22日の2日間、Prince Margaret Hospitalにある講義室で香港手外科学会が行われました。主題は“Advances in Elbow Surgery”でしたので肘関節疾患の発表が主体でした。香港の手外科医は100人もいないとのことなので会場は1つと学会自体は小規模でしたが、Discussionは活発に行われていました。私は“Sonographic evaluation of effects of the volar plate on trigger finger”について発表しました。

病院見学

主にPrince of Wales Hospitalで手術見学をしました。日本でも高名なPC Ho先生の鏡視下手舟状骨偽関節手術やSTT関節由来の掌側ガングリオン鏡視下切除等を見学し、改めてHo先生の関節鏡テクニックの凄さを知ることができました。また見学中Ho先生から30分のlectureを依頼されましたので、学位論文であるLateral epicondylitisについて講演しました。自分の研究だけでは30分の講演は厳しかったのですが、Traveling fellowに決まった時に、恩師である北海道医療大学 青木光広教授がLateral epicondylitisのスライドをあらかじめ、お貸しくださっていましたので、これ

を一部拝借して、無事講演を終えることができました。最終日にはHo先生の御自宅に御招待頂き、楽しく過ごすことができました。

最後にfellowにご推薦頂いた防衛医科大学 根本孝一教授、大阪掖済会病院 五谷寛之手外科・外傷マイクロサージャリーセンター長、研究でご指導頂いた北海道医療大学 青木光広教授、選出いただいた日本手外科学会 矢島弘嗣理事長、国際委員会担当 柴田実理事、和田卓郎委員長はじめ、お世話になりました先生方に厚く御礼申し上げます。



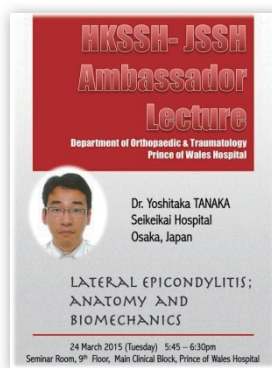
学会場にて (筆者中央)



Ho先生の自宅にて



Mini lecture



lectureポスター

手は語る ハンドギャラリー（生田コレクション10）

レンブラントの手

Rembrandt's Anatomy Lesson of Prof. Tulp

広島手の外科・微小外科研究所 生田 義和

1996年のある日、アムステルダムでの国際学会への出席を利用して、医局の若い人達数人と電車で一時間余りのデンハーグへ足を伸ばした。目的はマウリッツハイス美術館^aです。ここには世界的に有名なフェルメールの「真珠の耳飾りの少女」がありますが、今回のお目当てはレンブラントの「チュルプ博士の解剖学講義」です。館内は想像していたほどの混雑ではなく、目的の絵の前に早々と辿り着くことが出来、ほとんど独りで、長時間ゆっくりと鑑賞することができました。

この「チュルプ博士の解剖学講義」は、多くの話題の詰まった作品ですが、まずこの作品そのものについての解説と評価は、

①博士を含めて8人の人物が全体の画面の黄金分割点に三角のピラミッド型に配置され、②光がこの画面の左上から死体の右胸部を中心に照らし、その光の輪の中に登場した人物が浮かび上がり、他は周囲の闇と溶けあい、弟子たちの顔つきは真剣そのものである。③死体は左手のみがすでに解剖され、④博士の右手には鉗子に挟まれた指の屈筋が持ち上げられており、何かを説明しているような口もとである。

以上の私の個人的な情景説明以外に、いくつかの歴史的考察や絵画研究の成果から^b、⑤ピラミッドの頂点のすぐ右に1632の年号があることから、この作品はレンブラント（1606-1669年）が26歳の時に完成させたものであり、⑥博士の右肩あたりにある紙片には、この解剖を見学している医師たちの名前が記載されており、⑦解剖台の上の死体は1632年1月31日にコートを盗んだ咎で絞首刑になったアドリアン・アドリアスゾーンという28歳の男性だった事や、⑧当時オランダで公開されていた解剖学講義は年一回、冬に、処刑された遺体を使って行われていた。しかし、⑨「解剖ショーは当時の一般の人々に大人気で、入場料を払って多くの市民が詰めかけるイベントだったが、国中で死体解剖が行われると絞首刑になった死体が足りないという事情が出てくる。足りなくなるとどうするか。死んだばかりの遺体を墓から盗む。死体泥棒も警察の取り締りが厳しくなると、死体を盗めないなら死体を作ればいい、ということで浮浪者や売春婦、孤児などを酒に酔わせて絞め殺した殺人鬼まで出てくる始末。そこで議会は、救貧院などで亡くなった、埋葬費用のない貧乏人の死体を解剖用に回すという法律までできた。」^cなどである。

さて、整形外科医として最大の関心事は、左手の解剖所見が間違っていることであろう。すなわち、鉗子で持ち上げられている示指、中指、環指および小指の浅指屈筋が肘の部位で内側（尺側）ではなく外側（橈側）に付いているようにみえる事である。この事実については、ベサリウス^dの解剖図から写したので間違えたのではないかなどの説があるが結論は出ていない。

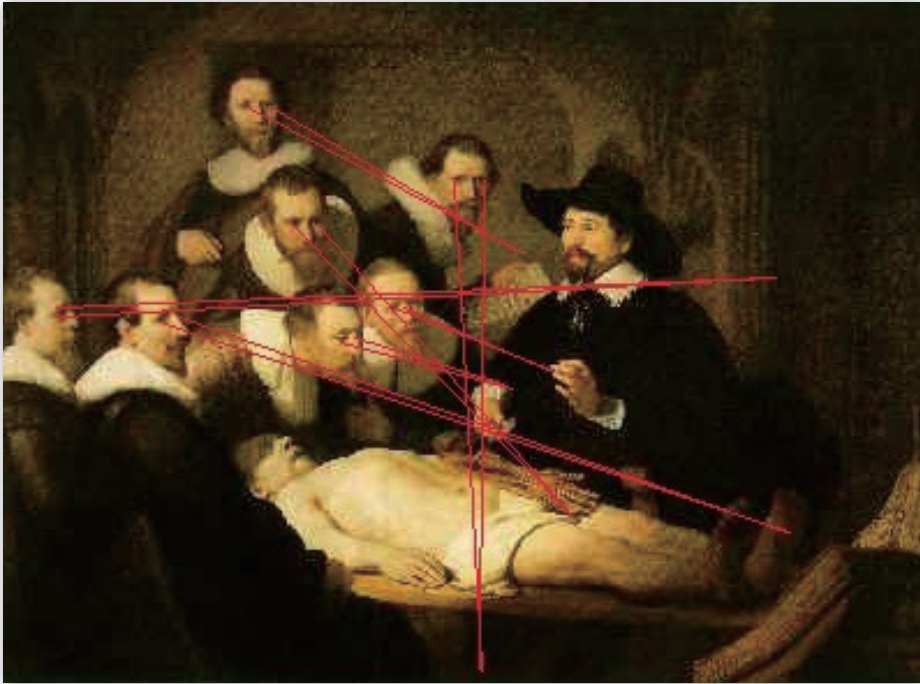


図1

私の考察は、①レンブラントが間違えた、いや、②すでに切離されてしまっていた屈筋の起始部を、恰もまだ切離されていないかの如くに描いてしまったので、誤りとなったとかの可能性はあるが、ひょっとすると、こうではないか。すなわち、③図1に見られるレンブラントの絵に、見学者の両眼の視線と思われる方向に赤線を引いたのは私であるが、その交点を観察してみると、誰一人博士の手元を見ていない。絵が完成した後、絵に描かれた屈筋の起始部の誤りに気付いたチュルプ博士がその間違いを咎めると、レンブラントは次のように答えた。「博士、解剖学講義において最も重要なことは、対象をしっかりと注視することであり、対象物から目を逸らすと誤った判断をすとか間違いを見抜けないことが起こる、という教訓をそっと入れました」と。それを聞いたチュルプ博士は感心して、絵の中の屈筋腱の起始部を訂正することをレンブラントに強要しなかった、のではないか。あくまで私個人の推察です。図2は、私の描いた「左手の指屈筋の構造に関する観察」です。

最後に：私自身が描いた鉛筆画(1と10は水彩画、5はクレヨン画)のコレクション開示は今回で10回目を迎えました。日手会ニュースの編集委員会に、今回あたりが最終回でしょうかね、とお尋ねしたところ、いえ、未来永劫いつまでも、と著者としては大変うれしい返事を頂きました。しかし、自分も是非載せてほしいと思われている会員の方も沢山いらっしゃると思ひまして、一応今回を最終回とさせていただきたいと考えています。将来、原稿の少ない折にでも、広報・渉外委員会からもしご依頼があれば、喜んでまた投稿させて頂きたいと思っています。長らくお読みいただいた会員の方々に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。



図2

-
- a マウリッツハイス美術館はピネンホフの一角にあり、ブラジル総督である伯爵の私邸として建てられた建物で、17世紀のオランダ・フランドル絵画が展示されている。
 - b 市民たちの画廊 NHK日曜美術館 名画への旅 第14巻、1992年
 - c 『怖い絵2』(中野京子著) より。Topsy Labs, Inc.
 - d アンドレアス・ヴェサリウス (Andreas Vesalius、1514年-1564年) は、解剖学者で医師、さらに人体解剖で最も影響力のある本、ファブリカこと“De humani corporis fabrica”(人体の構造)の著者。ヴェサリウスは現代人体解剖の創始者と言われる。

手外科温故知新： Sigmoid notchのsigmoidとは

京都大学医療技術短期大学部名誉教授 上羽 康夫

解剖学名集覧を見ているとギリシャ語由来の形容詞を持つ用語は少ない。例えば、Os sphenoidale 蝶形骨、M. trapezius 僧帽筋、Os scaphoideum 舟状骨などである。ギリシャ文字アルファベット24文字の第18番目に在るシグマ(Σ, σ)の形容詞 sigmoidもしばしば解剖学名に用いられ、Colon sigmoideum S状結腸、Sinus sigmoideus S状静脈洞などは医学論文の中でよく見かける。Sigmoid notchと云う語句は英語の手外科論文に時々現れる。このnotchは橈骨遠位端の尺側に存在する窩であり、尺骨骨頭部を受け入れる凹面は軟骨に覆われる関節面であり、遠位橈尺関節の橈側壁を形成する。

Sigmoid notchと名付けられているから、この窩は当然S字形をした関節面あるいはS字の部分を持つ窩であると私は長年信じていた。しかし、手術時に観察しても、解剖標本を調査しても、“notch”にS字部は見出せなかった。日本解剖学会編集の解剖学名集覧には橈骨の尺骨切痕incisura ulnarisと記載され、sigmoidを付した語句は全く見当たらなかった。英語を母国語とするイギリス、アメリカ、オーストラリアの手外科医達に「どうしてsigmoid notchと呼ぶのか教えて欲しい」と訊ねたが、不思議なことに、それに解答できる手外科医は誰も居なかった。結局、長年の友人であり、手外科の師でもあった米国Mayo ClinicのDr. James H. Dobynsに質問状をメールで送った。当初は意外な質問に彼も戸迷ったようであったが、親切な彼は友人：Stephen W Carmichael博士(当時Mayo Clinic解剖学名誉教授・国際解剖学会用語委員会副委員長)に問い合わせ、正式な英語の解剖学用語はulnar notchであり、解剖学用語にsigmoid notchは登録されていないのを確認して呉れた。また、「英語の“sigmoid”にはS字形を意味する場合、C字形を意味する場合があり、時には“new”とか“not previously known”を意味することもある」と教えて呉れた。ドーランド医学辞典には確かに“sigmoid : 1. shaped like the letter S or the letter C, 2. the sigmoid colon”と記載されている。“Sigmoid notch”がC形窩を意味するのであれば、私も納得できた。ただ、sigmoidがS字形ではなく、C字形を意味すると言われても、日本には納得できない人も居るだろうから、この際C-shaped notchと改称出来ないかと提案した。彼からの返事には、sigmoid notchの3次元解析をしたEvan D. Collinsらの論文を紹介しながら、語句“sigmoid notch”は現在の手外科領域では既に定着していて、改称は無理であろうが、Dr. Dobyns自身も“sigmoid notch”より“ulnar fossa”が適切だろうと結んでいた。

このメール論議後に彼は天国に旅立ってしまい、再び2人で楽しい議論を交わす機会は失われた。多くの手外科知識を授けて呉れたDr. James H. Dobynsに改めて深甚の感謝と哀悼の意を捧げます。

手外科領域の安全管理

医療法人寺西報恩会 長吉総合病院 梁 瀬 義 章

医療における契約は結果をすべて保証する請負契約ではなく、準委任契約である。また、その契約は双務契約であって、医師には説明義務があるし、患者には自己決定義務がある。しかし、患者は病院に行って、治って当然、関節拘縮や機能障害が残れば、病院の責任と考える場合がある。医療は不確実であって、いくらベテランであっても、ミスを犯すかもしれないのが、医療である。そこで大切なことは、治療や検査前のインフォームドコンセントである。医師は十分な説明を行い、患者はその説明を聴いて、どの検査や治療を受けるかを決定しなければならない。患者は医療に関しては全くの素人であるから、医療サイドにとっては常識と思われることでも、患者に対しては十分に説明すべきである。インフォームドコンセントに関して、最高裁が示した判例がある（最3小判H13.11.27）

すなわち、患者に対して病名や症状を説明する。そのうえで、これから行う検査や治療の目的と内容を説明する。そして、予想される結果やそれに伴う危険性を説明しておくべきである。また予想される医療行為以外にも方法があるか否か、検査や治療を受けないことで、起こりうる結果についても説明し、患者に選択させるというのが、現在のインフォームドコンセントである。

手の外科領域においてよく問題となるのは、小児であれ高齢者であれ、橈骨遠位端骨折後の変形治癒である。小児の場合の多くは、受傷時の骨折型（Salter-HarrisのⅡ～Ⅳ型）により、ある程度の成長障害や変形は避けられない。しかし、治療開始時に十分に説明しておかなければ、成長障害で橈骨が短縮すると、治療が不適切だったと患者は不満をいう。高齢者の橈骨遠位端骨折の場合、保存的治療を選択する場合もある。保存的治療を積極的にされているS医師は、橈骨の短縮が起こっても患者さんからの不満もなく、紛争の当事者になっておられない。保存的治療の適応を厳格にされ早期から手指の運動を妨げないギプスや、治療開始時のインフォームドコンセントが十分になされているからだと思われる。高齢者の場合、少々の変形が残っても、許容範囲である場合が多いが、美容師など手を使う職業の方の場合は、いくら本人が保存的治療を望んでも、変形の程度が回内・回外運動を極度に制限すると思われる場合などは、手術の必要性を説明し、納得させて手術をしなければ、変形治癒後に患者が裁判を起こして、医療側が敗訴した例がある（大阪高判 平成24年10月25日、日整会広報室ニュース 94号）。本件は80歳の独居の女性で、現役の美容師が、本人も強く保存的治療を望み、頻回のX線撮影を拒否し、結果として変形治癒が遺残したため、大学病院で矯正骨切り術が行われたが、可動域制限等が後遺した。患者は医師の説明義務違反等の過失責任を求めて提訴した。裁判所

は説明義務違反と変形治癒との因果関係は否定したが、患者の自己決定権を侵害したとして、慰謝料60万円を認容した。

医師と患者の間に、信頼関係が成り立っておれば、紛争にならないような事例でも、患者の常識と医師の常識の差に気付かず、結果として患者サイドに不幸(不自由)な結果が残ると、医事紛争になる。医師として、十分な説明を行い、患者に自己決定させることにより、紛争にならないよう努力すべきである。

関連学会・研究会のお知らせ

◆第24回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：平成27年10月8日(木)～9日(金)
会 場：岩手県民会館
会 長：小林 誠一郎(岩手医科大学医学部形成外科 教授)
詳 細：<http://jsprs24.umin.jp/>

.....

◆第30回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：平成27年10月22日(木)～23日(金)
会 場：富山国際会議場ほか
会 長：木村 友厚(富山大学大学院医学薬学研究部整形外科・運動器病学 教授)
詳 細：<http://www2.convention.co.jp/joakiso2015/>

.....

◆第42回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会 期：平成27年11月26日(金)～27日(土)
会 場：ラフレさいたま
会 長：朝戸 裕貴(獨協医科大学形成外科 教授)
詳 細：<http://jsrm42.umin.jp/>

.....

◆第26回日本小児整形外科学会学術集会◆

会 期：平成27年12月4日(金)～5日(土)
会 場：長良川国際会議場
会 長：清水 克時(岐阜市民病院脊椎センター長、岐阜大学名誉教授)
詳 細：<http://jpoa2015.umin.jp/>

.....

◆第28回日本肘関節学会◆

会 期：平成28年2月12日(金)～13日(土)
会 場：岡山コンベンションセンター
会 長：橋詰 博行(笠岡第一病院整形外科)
詳 細：<http://www.convention-w.jp/elbow28/index.html>

.....

◆第8回専門医試験について◆

会 期：平成28年3月20日(日)
会 場：ステーションコンファレンス東京
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/infomation/gokaku.html>

編集後記

平成27年4月15日に行われた代議員会で定款第25条が変更されました。専門医制度の確立に向けて、理事8-12名のうち、3名は日整会専門医から、3名は日形会専門医から選ばれることになりました。理事の選出方法に関して活発な議論がなされたうえで、大多数の代議員が今回の案に賛成票を投じました。5月は大阪維新の会の橋下市長が推し進めていた大阪都構想案が大阪市の住民投票で敗れました。既成のシステムを改革するには大きなエネルギーが必要ですが、手外科学会は難産を乗り越えてまとめることができ、益々の発展が期待されます。

生田先生のハンドギャラリーは第10回となります。自筆の絵も交えて、今回はレンブラントの“チェルプ博士の解剖学講義”の油彩に対して独自の見解を述べられました。見学者の視点、屈筋腱の起始部の誤りなど読者が興味を持つ切り口です。生田先生は今回でこのシリーズを一旦終えるとのこと。残念でありませんが、これまで長期に渡り楽しいニュースを御提供いただきありがとうございました。今後、season 2が登場することを期待いたします。

手外科温故知新では、上羽先生がsigmoid notchの所以を記載されました。私もなぜsigmoidかと思ったことがありましたが、調べることなく尺骨切痕の英語版で済ませていました。Dobyns先生とメールをやり取りしての大調査は上羽先生ならではのことであり、会員一同納得できたのではないかと思います。

今年は、蔵王山、浅間山、箱根山、口永良部島と噴火のニュースが相次ぎます。日本列島に悲惨な災害が生じない2015年であることを祈念します。

(文責：白井久也)

広報・渉外委員会

(担当理事：島田幸造, アドバイザー：西浦康正,

委員：岡崎真人, 垣淵正男, 草野 望, 白井久也, 千馬誠悦, 日高典昭)